氏　　名	佐々木　ひろこ
学 位 の 種 類	博士（美術）
学 位 記 番 号	第 81 号
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
論　文　題　目	絵画をめぐる全体性 －〈「場」の絵画〉の生成とその可能性－
審　査　委　員	主査　教授　石原　友明 教授　井上　明彦 教授　加須屋　明子 教授　赤松　玉女 加藤　瑞穂（大阪大学総合学術博物館招聘准教授）

論 文 の 要 旨

絵画におけるモダニズムは、19 世紀後半に登場したクールベなどの現実主義、マネを含む印象派、モローを代表とする象徴主義の作家達に始まり発展を遂げてきた。純粋な視覚性を追求するモダニズムにおいては、対象が描くことの起点として置かれ、作者はそれを実現し、鑑賞者によって追体験される、というのが絵画の成立する道筋である。作者は自身の視覚体験を画面に表し、鑑賞者はそれを追体験するため、身体性を排除し「目」のみの存在として絵画を鑑賞することが求められる。これは、ホワイトキューブが近代以降、美術館をはじめ多くの展示空間に採用されてきたことからも明らかであろう。

しかし、鑑賞者は実際に自身の身体をなきものとすることができるわけでなく、その絵画経験には常に自身の身体が伴っている。このような問題意識から、近年イヴ＝アラン・ボワは、モダニズムにおける純粋視覚の追求と、それに伴った視覚における時間性や知覚主体としての身体の排除に警鐘を鳴らしている。また、近年の絵画作品には、身体性をかぎにモダニズムに規定されていたフレームから大きくあり方を広げている展開も見られる。中西夏之は絵画が鑑賞者に求める身体性をふまえ、自身の作者としての身体と画面の関係を画面上に明示する、支持体を水平方向に据えその関係を捉え直すなどしており、その好例と言えるだろう。これらの試みで行われているように、鑑賞者の身体を排除するのではなく積極的に働きかけることは、より本来的な絵画経験を生むのではないだろうか。

私は、絵画制作や展示を行う際に、その構成要素として「作者・鑑賞者・対象」を考えており、それら一つひとつに「身体性」を持たせることを常に意識している。従来は、対象は描くことの起点におかれ、作者はそれを実現し、鑑賞者がそれを追体験するというのが絵画を成立させる道筋であった。その中で、作者・鑑賞者・対象はそれぞれ独立した要素として絵画を成すものとされている。しかし、私は作者・鑑賞者・対象は、それぞれが身体性を持つことで相互に関係し、モダニズムの枠組

みを越えた新たな絵画経験を実現することができると考えている。

本論では、モダニズムを「純粋視覚によって規定された、作者が固定的主体となる絵画経験」と定義し、作者・鑑賞者・対象が身体を介して繋がり、複雑に絡み合う場を〈「場」の絵画〉と呼ぶ。またここで取り上げる絵画経験とは、鑑賞者の鑑賞経験のみに留まらず、ある絵画の生成から鑑賞までを含めて指す。そして、〈「場」の絵画〉を形作る絵画の諸要素の身体性とその繋がりに関して考察し、モダニズム以降の作者及び私自身の作品を比較・分析することで、一義的なモダニズムの絵画経験とは異なるより全体的な絵画経験のあり方について考察を行う。また、〈「場」の絵画〉において、絵画の諸要素が身体を介して繋がることで生まれる不可分な領域は、作者が固定的主体となるモダニズムの絵画経験を越え、絵画経験の主体性を移動させ得る場であることを述べ、〈「場」の絵画〉が生む新しい絵画経験について、これまでの私の取り組みを紹介し、検証する。

第１章では、作者・鑑賞者・対象の身体性のあり方を明らかにするため、主にモダニズムの作品・作家を取り上げ、これまでの作品から、純粋視覚の中での身体性の発露と、それを超えた作者・鑑賞者・対象の身体について考察する。1-1では作者の身体の例として純粋視覚的な画面に入り込む作者の身体を観察し、また作品を成す中心として、作者の視覚のみならずその身体が据えられている例を取り上げる。続く1-2では、鑑賞者の身体の存在を裏付ける作例を挙げるとともに、モダニズム以降展示空間として広く採用されてきたホワイトキューブによる鑑賞者の身体の規定について検討する。1-3対象の身体では絵画の中に分節的に立ち上げられる身体、及び人物像において可能な身体性について考察する。

第2章では、身体を持つ作者・鑑賞者・対象の不可分な領域について論じる。“見る”ことにおいて繋がる作者と鑑賞者の身体性を〈見る身体〉、描かれ結びつく対象と鑑賞者の身体性を〈描かれる身体〉、画面上の軌跡として繋がる作者と対象の身体性を〈現れる「身体」〉と呼び、それぞれの領域に及ぶ事例について、自作との関連を交えながら紹介する。2-1〈見る身体〉では鑑賞者が作者と共有する身体について考察し、自作での鑑賞の場と日常空間の接続について紹介する。2-2〈描かれる身体〉では、対象によって引き出される鑑賞者の身体性について考察し、自作については鑑賞者に働きかける対象を描く描画素材の物質性について紹介する。2-3〈現れる「身体」〉では対象化される作者の身体性について考察し、自作において〈現れる「身体」〉にあたる、制作中の身体感覚である「遠くの身体」による描画を紹介する。

最後に第 3 章では、2015 年に行った自作の展示を例に〈「場」の絵画〉の在り方について検討する。〈「場」の絵画〉では、絵画経験における主体性が、〈見る身体〉・〈描かれる身体〉・〈現れる「身体」〉の境を越え、作者・鑑賞者・対象の間を自由に移動し得ることを述べ、〈「場」の絵画〉による絵画経験が、純粋視覚のそれとは異なった、全体性を持つものであることを述べる。

審 査 結 果 の 要 旨

佐々木の研究は、「ひとがひとを描くこととは何か、またそれはどこでどのように描かれ、見られるのか」という、絵画をめぐる根本的な問題意識から、＜身体＞を核にして、描くことと見ることからなる絵画体験の全体性を取り戻そうとするものである。この試みは、佐々木が「純粋視覚によって規定された、作者が固定的主体となる絵画体験」と定義するモダニズム絵画に対置するかたちで、感覚や直感に溺れることなく明晰な論理を希求する考察と、多彩な制作実践を通してなされている。

佐々木は、作者、鑑賞者、対象の三つの契機が身体を介して相互的につながり合う絵画経験を＜「場」の絵画＞と名づけ、その実現をめざす。また論文では、それぞれのトピックに関わる歴史上の画家たちの作品の分析と、それに対応する自作の検証をペアに繰り返し行ない、独自の理論構築が試みられる。

第1章では、作者、鑑賞者、対象の三つの契機における身体のあり方を問う。まず「作者の身体」という観点から、マティスの《画家とモデル》、田中敦子の「ベル―電気服―絵画」の連環を分析し、自身のさまざまなポーズの立体的な人型を展示空間に配した試みを再検討する。第2節「鑑賞者の身体」では、鑑賞者の身体を排除するホワイト・キューブ＝モダニズム的な絵画展示を批判し、鑑賞者に自らの身体を意識化させる試みを自他の作品から抽出・分析する。第3節では、身体を描くことの可能性を考察し、そこから自作におけるポーズや部分対象の描き方、有機的な筆触の効果を検証する。

第2章では、先の三つの契機が身体を介してつながる＜場＞を、作者と鑑賞者の身体がつながる「見る身体」、描かれた対象と鑑賞者の身体がつながる「描かれる身体」、作者と描かれた人物の身体がつながる「現れる身体」という三つの位相において考察する。「見る身体」では、作者の視覚経験に鑑賞者のそれを接続するための方法として、時間的プロセスの提示や、展示空間の境界・床や壁への介入、自然光の使用、導線の操作が検討される。「描かれる身体」では、不完全で暗示的な物語性の提示による画中の人物への鑑賞者の心理的身体的な没入の可能性が検討される。第3の位相「現れる身体」では、中西夏之の＜絵画場＞の理論と作品を検討し、佐々木の＜場の絵画＞がそれとは異なる画面と身体の距離や、重力から自由な水平・垂直の関係の捉え方から成ることを明らかにする。

第3章では、モダニズム絵画においては作者が絵画経験の固定的主体になるのに対し、佐々木の＜「場」の絵画＞では、先の三つの位相を主体が自由に移動することを、彼女がホワイトキューブとは異なる広大な会場（KIITO）で行なった展示《絵の名前なし》によりつつ説く。

本審査で発表された大学会館での作品はKIITOでの展示と対をなすものである。天窓と周囲の出入り口を開放して照明を消すことで、外部空間と接続され自然光のなかでの鑑賞経験は佐々木の言う〈場の絵画〉の実践的試行となっていた。選ばれた会場は便宜的ではなく、鑑賞空間の制度的要件を排除するための積極的選択である。５点の絵画は壁から切り離されて、膠で固められた太い麻ロープや粘土を塗り付けた竹に支えられ頼りなげに自立している。ある作品は一本のワイヤーで吊されて外からの風で不安定にゆれている。それら展示上の工夫はすべて近代的制度の外部へと鑑賞

者を連れ出すものである。変化する自然光で満たされた空間に留まると、徐々に鑑賞者の目は慣れて、からだと作品空間が順応する過程が否応なく意識させられる。そのような鑑賞者の身体との呼応で可能になる繊細で豊かな絵画経験が鮮やかに提示されていた。床とキャンバスの間に挟まれた手跡の残る粘土や床の段差もまた、身体的な感覚を鑑賞者に意識させる要素である。ロープ、竹、粘土といった、要素は無駄なく相互補完的であり繊細な絵画経験の場が形成される。そこに佐々木のいう〈描かれる身体〉が一定実現されたとみることができるだろう。

佐々木が試みる絵画経験における「主体の移動」は、フレームの定まった画面に均質な人工照明をあてて作者が作った画像を鑑賞者に提供する通常の絵画展示ではなく、変化する自然光に浸された空間に鑑賞者が身体的に溶け込み、そこから不完全な人体イメージが有機的な筆触とともに浮かび上がるような経験の場において実現される。そのおぼろげにゆらぐ環境のなかで、制作時の作者の身体性と鑑賞者の身体性との交換、作者と描かれた人体の身体性の交換、描かれた人体と鑑賞者の身体性の交換が可能になると佐々木は言う。＜「場」の絵画＞とは、「ひとを描く」というきわめて原初的な営みを通して、こうした多元的な交換の位相の実現をめざすものであり、その交換こそがモダニズム絵画において抑圧・排除されてきたものにほかならない。

佐々木の研究は、人物を描く画家の視点から絵画の新しい鑑賞の場のあり方をつくり出そうとするオーソドクスなものであるが、それが、＜作者＞＜鑑賞者＞＜作品＞というイデオロギー的規定をゆるがせるばかりか、絵画のあり方、絵画と環境の生きた関係、人間の身体とは何かという地平にまで考察の手をのばし、美術史上の作品を見る新しい視点を創出するに至っている。思考を明示するために随所に挿入されるイメージ図も効果的である。多少の論文の体裁上の不備は否めないが、制作者が体験のなかから掘り起こした思考をここまで共有可能とする努力は、絵画にたずさわる人々にいまだ尽きせぬ絵画の可能性を指し示すものであり、本学博士課程の研究のひとつの指標にもなりうると高く評価できる。